



【 編集後記 】

稲見昌彦

副所長 / 広報広聴・情報支援室室長 / 教授 (身体情報学分野)

本誌『先端研ソーシャルレビュー』第2号をお届けできることを大変嬉しく思います。記事全体を見渡すと先端研という組織が持つ多層的かつ動的な姿が、これまで以上にはっきりと立ち上がってきました。

冒頭では、杉山所長が就任2期目にあたり、先端研のこれからを示す所信が語られています。加速する技術革新、揺らぐ国際秩序、多様化した社会課題。こうした環境の中で、先端研がどのような価値を社会に届けていくのか、先端研の広報・広聴担当者としてしっかりと受け止めたか思います。

続く特集「先端研の顕微鏡」では、駒場リサーチキャンパス公開を契機に研究室と事務部が合計13の「顕微鏡」を持ち寄り、それぞれが向き合う世界をどのように可視化しているかが紹介されました。太陽電池の性能を左右するナノ構造の解析、反射光から得られる不可視情報、オープンソース機器による新たなフィールド観察手法など、先端研がいかに多様かつ複眼的な視点で世界を眺めているのか鮮やかに伝わってきました。

さらに、石川県との連携特集では、自治体との協働、奥能登の復興に寄り添う調査、産業・教育・地域振興への関わりなど、先端研が地域とともに歩む姿勢が丁寧に記

されています。各地域の現場に寄り添う姿勢は、先端研の大きな特徴です。明治期の東京帝大は「文明の配電盤」とも称されましたが、「クリエイティブのハブ」として先端研の役割が一層期待されているように感じました。

国際的な視野を示す企画としては、創発戦略研究オーブンラボ(ROLES)に関連したチエコ共和国ペトル・パヴェル大統領の来訪が挙げられます。安全保障情勢に関する講演と議論は、学術とグローバルな課題とが直接交わる貴重な場となりました。分断や緊張が高まる世界において、アカデミアが果たす対話の役割を象徴する内容と言えるでしょう。

こうした多様な企画が、個別の話題として並ぶだけでなく、互いに呼応し合いながら「先端研という場の現在地」を浮かび上がらせていることこそが、本号の大きな魅力です。研究、地域、国際、安全保障、教育、そして未来戦略。これらを一枚の誌面に束ねることができるのは、領域横断を本質とする先端研だからこそ可能なのだと思います。

先端研ソーシャルレビューが、研究と社会をつなぐ開かれた対話の場として、さらに発展していくことを願っております。